

人を人と思わぬ狂った思想に染まった手記を読み終えた貴方は、気付けば額と背中が冷たい汗にびつしよりと濡れていた感覚に気づき、ごくりと唾を飲み込んだ。

仔山羊

「ん、マスター？」

「……どうかしたんですか？何か、様子がおかしくなったように感じるんですけど？」

耳につけた山羊の蹄のイヤリングを揺らしながら、少女が貴方の顔を覗き込む。

仕草こそ愛らしいものだが……この少女は、貴方をこの手記の人間と勘違いしているのだろう。しきりにシヨゴスと戦う事や母親への嘆願について言っていたのは、恐らく彼女をあの場合に招いた……呪文とでもいうべき言葉の中に、そういった意味合いが含まれていたのだと察せられる。

ようやく、何故あんな化け物がいたのか。

……そして、そんな化け物と対抗出来る貴方から精を搾り取った少女が何故現れたのか。その真実を知ってしまった貴方は、これから先どうすべきなのかを考え、頭を抱えた。

仔山羊

「マスター……？」

しつかりして下さい！そんな調子では私がシヨゴスより優秀とお見せ出来なくなります！ちゃんと見ていて、判断して貰わないと困るんです！」

貴方の苦悩の理由に気付いた様子もなく、黒い仔山羊である少女は、腰に手あてムスつと頬を膨らませた。

何一つ気付いていないのであろう少女に、貴方は思わず肩を落とし大きなため息を吐き出してしまった。

あの化け物、シヨゴスを倒せばこの事態は全て収まるのだろうか……？

そんな、どうしたらいいのかはつきりと分からない事に頭を悩ませながら、改めて少女の様子を伺おうとして……窓の外から漏れ聞こえてくる、小さく不気味な音に貴方は気付いた。

シヨゴス

《「い」あ……いあ……ないあー……てえぶ、てげえー……いあ……いあ……！》

その音に導かれるように貴方が視線を窓へと向けると、声の響いてきた窓のガラス一面に、緑色の粘液が張り付いているのを貴方は見てしまう。

——ああつ、窓に……窓につ……！

《がしやあああんつ……！》

(窓の割れる音)

シヨゴス

《でけえりいりいりいりいりい……！……！……！》

仔山羊

「つ！？マスター……私の後ろにつ……！」

《がばっ……だんっ!》

(“貴方”を庇い、マスターの前に躍り出る仔山羊の音)

シヨゴス

《でけえ……り、りいい……っ!》

少女の鋭い叫びがあがった瞬間窓は割れ、ガラス片を散らばらせながら部屋の中に名状し難い緑色の……いや、僅かに玉虫色が混ざるような体色に変化した粘液の化け物、シヨゴスが侵入してくる。

仔山羊

「めええ……!! 部屋の様子から、入って来れないのかと思っていたんですけど。それでもなかったみたいですね……!」

シヨゴス

《でけえ……ちがあう……。はいれな、がっだあ……。

で、も……脳、つかえば……呪文使えば、ちがあうう……でえ、けええええ》

威嚇するよう鳴き声をあげながら、少女が貴方の前へと躍り出て、舌打ちするように言葉を吐き出す。

その瞬間……酷く耳障りな、ぼこぼこ泡立つような不快な声が、返事を返した。

仔山羊

「……今、言葉を？」

シヨゴス等という下等な奉仕種族の癖に、言語を操る知能があったのですか？」

シヨゴス

《でけええ……ひど、だべだあ……いっばい、だべだあ。

体のづくりい、……脳、使い方……知った。てけええ……》

ぐちゅり、ごぼり……凡そ自分の重さを支えるという言葉すら知らないような粘液の体が、物理学の方式に逆らうかのように逆巻きに盛り上がる。

シヨゴスは人の形……そう表現するには余りに不恰好で不快極まるものではあったが、四肢を携えた人のような形へと姿を変えていく。

《ぐじゅりぐじゅり……》

(粘液質な音を立てながらシヨゴスが変形する音)

シヨゴス

《人、食ったあ……脳、魔術……神々への願いの仕方、知った。

おで、お前と争う……つもりない、人間おいてけば、それでいい……おで、もつと知恵つける……でげえりい》

玉虫色がかった緑色の粘液の化け物は、体だけは人のような姿へと完全に変形を遂げた。

だが、全身の粘液が口や目のような部分を作り、絶えずぼとぼとと自身と同じ色の粘液を垂れ流している様は、人に似た形を取ったからこそ余計におぞましく、より一層、生理的な嫌悪感を

貴方に与えるのであった。

人でなかった化け物が、人のような姿で言葉を使う事に恐怖する貴方を他所に、少女と化け物の会話が繰り広げられていく。

仔山羊

「奉仕種族風情が生意気を……そもそも私の契約は貴方の打倒です。」

腹立たしい嘆願ではありませんが、お母様が認めた以上、それに応えるのが仔たる私の役目！それを違(タガ)えるなど、あり得ないのです！」

シヨゴス

《それ、ちがう……。人間、おでが勝ったらお前をおでに食わせるつもりい。

おで、お前と戦う……。疲れる思った。やりあうだけ、損する……。

もし負けたら、おで死ぬ……やだ》

仔山羊

「何を言つて……マスター？

奴のいう事は本当ですか？私を……あの不快な粘液の中に叩き込むつもりなんですか！？」

シヨゴスの言葉に、少女がうろんな気な瞳を貴方に向ける。

手記の人物はそのつもりであったかもしれないが、貴方はそもそも巻き込まれただけの立場だ。

無論、そんなつもりはないと必死に首を横に振ると、貴方をじつと見ていた少女が小さく頷いた。

仔山羊

「……ふむ、その様子では嘘はなさそうですね。

まあ、もしそうだとしたら……お母様と私を侮った報いを、マスターには受けてもらうつもりですが。

……どちらにしても、それはお前を倒した後の事。私の行動は変わらないのです！」

シヨゴス

《でー……げ、りいりい……！

神の子、ばかつ！ばかつ！……ひど、ぐいもの……おでもと食う、脳覚える……つ！

邪魔するなら……お前もぐううううつ、てけりい……いあ、いあ、ないあ……るうううつ》

仔山羊

「させないのです！これで、潰れて……しまえですつ！

《ぶーん……がきんつ》

(仔山羊の振るつた髪が、シヨゴスの障壁にぶつかり弾かれる音》

仔山羊

「つ！？これは……被害を逸らす障壁の嘆願？

おのれ、奉仕種族風情が生意気な……つ！

シヨゴスの人の絶叫にも似た怖気の走る叫びと共に、粘液質の体が淡く光を放つ。

それを遮らんと振るわれた、山羊の蹄の形に黒髪を変えた少女の攻撃が、粘液質な体に触れると思つた瞬間、がきんという硬いものにぶつかるような音が響き、弾かれる。

先ほどは確かに通じていたはずの攻撃が、今は……体を覆うように淡く光る燐光に遮られ、シヨゴスに届かない。

シヨゴス

《でげえー……つ……！》

人、脳、食う！脳、教える！おで、覚える！神々知る……！

おで、強いっ！てえけえりいーっつ》

仔山羊

「このっ、このっ、このっ……！」

千匹の仔を孕みし森の黒山羊の娘たる私に対して、よくもこんな不遜な真似を……許せないですっ……！」

《ぎんっ、がきんっ、ぎんっ》

（何度も髪を振るうが、その度に弾かれる音）

シヨゴス

《てーけえ！てけえりいっつつ！

にやる・しゅたん！にやる・がしやんな！にやる・しゅたん！にやる・がしやんな！……てけえええ……！》

何度も少女は髪を、蹄、角、或いは純粹に巨大な塊の形に変え振るい続けるが、どうしても後一步という所で、それが粘液質の体を貫くまでに至らず止まってしまふ。

シヨゴスはそれを見て、泡立つ粘液を纏わせた不快極まる嘲笑の叫び声を上げ、貴方には理解出来ぬ言葉を紡ぎ続ける。

《がおんっ……！がしっ……じゅるう》

（髪の一部がシヨゴスにつかまれる音）

シヨゴス

《つーか、まえたあ……食う。食う……！

神の子……食うっ、てけりいっ……！》

仔山羊

「つ……放せ、放しなさいっ……！」

私の体は、お前のようなものが触れていいものではないのですっ……！
放せ！放しなっ……あ、ぐっ……きやあああっ……！？」

《じゅううう……》

（捕らえられた髪が、シヨゴスの中で溶けていく音）

幾度も燐光に攻撃を阻まれたために、憤（イキドオ）った少女が放った一撃が、一際大きな音を立て見えざる障壁を叩く。

その瞬間、障壁に食い込んだ彼女の髪に、人の腕のように変化させていたシヨゴスの触腕が伸

び……それを粘液の中へと取り込んでしまう。
そして、じゅう、という酸が何かを焼き溶かすような音と共に、少女の苦痛の悲鳴が部屋中に広がった。

シヨゴス

〈てけええ……っ！！神の子……美味、美味っ！

もつと、もつと食べる……食うう！てけりいーっ！〉

仔山羊

「放せ……ぐう、放すですっ！？」

こんな、奉仕種族風情が、うぐ……ぐう、あ……あああっ！？」

《ぐちゆる……ずる、ずる》

（取り込まれた髪から、仔山羊が少しずつシヨゴスに向かって引つ張られていく音）

ずるずると、シヨゴスに取り込まれていく髪の毛の量を増え、少女が引き釣り込まれていく。

必死に抵抗しようと、少女は残った髪で床を刺し体を固定しようとするが、先ほどの一撃に大部分の髪を使ってしまったために。

徐々に徐々に、抵抗虚しく不快な玉虫色を放つ緑の粘液へと体を引き寄せられていってしまう。

仔山羊

「あぐっ……！！うう……ぐうっ！

こんな、こんなはず……私が、負けるなんて……そんなはずないですっ！ない……のにっ！

お母様に、任されたというのに、こんな……うっ、あぐ……いやああっ！

うっ……、ごめ……なさ、おかあさ……まつ。ごめなさ……ますたあ。

……っ！にげ……て……っ！」

今まで母親の名を出し強気に振舞っていた少女が、小さく嗚咽を漏らした。

信じられないと唇を強く噛み締めながら必死の抵抗をしながら……それも叶わないと悟ると、懺悔するように瞳を瞑り、ほんの一瞬、許しを請うように母の名を。

そして小さく、貴方に向かい謝るような、小さな声が漏れ出ていった。

《きゅっ……！！がしゅんっ、どぼどぼ……！！》

（貴方が、手記にあったガソリン缶を引つ張り出し、シヨゴスに向かって投げる音）

シヨゴス

〈てけえ……！！？人間……？〉

突然の状況に金縛りにあったように動けなくなっていた貴方は、その少女の囁きに我に返り、あの手記に書かれていた、机の脇の大きな缶を取り出すとシヨゴス目掛けて放り投げた。

投げられたソレはシヨゴスに当たる事はなかったが、近くの床へと落ち、中からどぼどぼと液体を撒き散らす。

そしてそれは、独特な鼻を突く香りを放ちながら、シヨゴスの周囲に広がっていく。

——その子を放せ、この……っ、ねちよねちよの化け物があつ！

《カチツ、シュツ……ボツ、ぐおおおおおおつっ!!!》
(ライターに火をつけ、撒いた灯油へと投じる音)

ライターごと、火をシヨゴスに向けて放る貴方。
瞬間、むせるような匂いが失せ、耳を破壊するような爆音と共に、シヨゴスを中心とした周囲が炎に包まれる。

シヨゴス

《でえええ!!??》

火、火……っ!??てけえ、ええええええ!!??》

全身に纏わりつく炎の勢いに押され、ぼごと沸騰するように泡を吐きながら、少女を捕らえている触腕を含め、人のような姿をしていた体はみるみると形を崩していく。

仔山羊

「あつっ!?

でもこれ……あ、マスター!?!」

——手を、早く……!!!

《ぎゅ……がぼつ》

(手を握り、仔山羊を抱きしめる音)

シヨゴスの力が弱まったのを見るなり、貴方は逃げ出すべく少女に向けて手を伸ばす。そして、未だしつこく絡みつく粘液から彼女を引き戻すように力を込め、驚きの声をあげる彼女を胸元へと抱きとめる。

仔山羊

「あう……ま、マスターに助けられるなんて……。

うう、こ……こんながあるなら最初から言つて下さいです!

むう……あう、恥ずかしい所、見せちゃったです……」

胸元の少女は、貴方に助けられるとは夢にも思っていなかったのか。

恥ずかしいとも、屈辱とも分からぬ顔で顔を赤くさせているようであった。

思わぬ反応に口元が綻びそうになるが、今は兎にも角にも逃げねばならない状況。

彼女が手元に戻ったならばと駆け出そうとした瞬間……。

《しゅっ……ぐちゅうつ!!!》

(触手が再び、少女をつかむ音)

シヨゴス

《でえげえー……にが、にがさな……てけえええ!

まだ、まだ……死にたくない……のう、食う!もつと知恵……知恵つけるうつつ!!!

神の子食えば、もつと、もつと……まだいぎるうつつ!!!》

全身をぐずぐずと崩しながらも、シヨゴスが最後の抵抗とばかりに再び触手を伸ばし少女を捕らえる。

だが、捕らえる端から炎はその粘液質な体を焼いていき、先ほどまでの勢いはもはやない。

仔山羊

「お前のせいでお母様に……マスターにも、恥を晒したじやないですか！ いい加減、もう……終わつてしまえです……！」

《ぶんっ……どごんっ、ぐおおおおお!!ばさっばさばさ……》

（再び髪を振るい、ししヨゴスの上に本棚を倒す音十本が落ちる音）

シヨゴス

《でげええええええ！！？？》

でげえ！？もえ、もえ……たすけええ……！？

にやる・しゅたん！にやる・しゃがんなああ……ないあるらあああああ！！！！？？？

てげりいっしー！？！《？》

先程の名誉挽回とばかりに、少女が再び黒髪を振るう。

その髪はぎつしりと本が詰まった本棚に絡みつき、引き倒す。

既に溶け落ちていく最中のシヨゴスはその重みに苦悶の声をあげるが、ばさりばさりと零れ落ち、粘液に混ざりながら燃えていく本と共に、自身の終わりを察してしまつた絶望の叫びをあげる。

仔山羊

「これでいいです！」

あれだけ弱っているなら、もう抜け出せないです……！！

マスター、今のうちに外へ！」

少女の声に頷き、貴方は彼女の手をとり玄関へと走り出す。

忌まわしき化け物と、化け物を招いた傲慢なる知識の宝庫となつた館の焼け落ちていく……最後の音を聞きながら。

シヨゴス

《でけえ……り……りい……》